



「突っ張れ剛」 (中)

巨人型の不安よぎる

大相撲11月場所で残念だったのは新大関・正代(29)の途中休場だった。昇進を決めた9月場所(13勝2敗)の勢いもあって連続優勝も期待されていた。テレビではそう大きなケガには見えなかったが初日から3連勝となった高安戦で左足首を負傷。次の初場所(1月10日初日・両国国技館)は早くも大関力ド番になる。正代は1.84、165キ。一方21歳の柏戸が大関昇進した時は1.88、172キ。体重の差は42キもある。

飽食の時代の今、大型力士のケガは太り過ぎが原因と言われることが多い。

柏戸に戻れば師匠・伊勢ノ海親方は「もしかしたら巨人型の力士かもしれない」として、当初半信半疑の見方をしていたふしがあった。

師匠は相撲長かった

師匠自らも当時としては長身の1.85。安芸ノ海、照国と横綱相手に右四つから左右の投げで揺さぶりを星を挙げたこともあったが、長い相撲が多く、勝ち身は遅く、小型力士にかき回されもした。

長身巨人型という色分けがあった時代だ。体の大きい人は大きいなりにゆっくりにした相撲を取って、徐々に体勢を良くして最後は勝つ。一つの典型として親

方は1.84、180キだった大起(元小結)を挙げた。さかのぼれば上山出身、2.04の出羽ヶ嶽はまさしくそうだった。

千代の山がお手本

16歳で入門した剛少年(柏戸)は日々の生活態度はゆったりおとなしく、1.82の身長がまたまた伸びようとしていた姿に、師匠は「巨人型」の予感を一時抱いたのだ。

だが相撲を取らせて見ると案外出足が良い。ちょうどいい手本もいた。千代の山だ。柏戸(47代)から6

代前の第41代横綱。現相撲解説者・北の富士、ウルフこと千代の富士の両横綱の師匠である。1.89(122キ)の長身から繰り出される突っ張りは目を見張るものがあった。

幕下時代、相撲誌の若手インタビューで当時の「富樫」は「千代の山関が目標です。突っ張りが自分の武器です」とはっきり答えている。

千代の山は上体のパワーは恐るべきものがあったが、組まれると膝痛、腰痛を抱えていた。申し合い稽古を重ねたが、突っ張りが効き過ぎて相手から敬遠され、思うように自らを鍛えられないジレンマを抱えるうちに下半身を故障する不運があったのだ。千代の山は柏戸が入幕直後、引退したが「自分の後を継ぐような威勢のいい力士が出てきた」

横綱朝潮(当時朝夕)を突っ張りからのノド輪で攻める若き柏戸



伊勢ノ海親方(左)と柏戸。当時生まれな長身師弟だった

た、巨人型の体形を心配しつつ、師匠は突き押しの稽古を反復させ、そのうち確信を持てた。「柏戸は大柄だが、小柄な力士がやるような速い相撲を取らせることができるはずだ」というものだった。その中、柏戸の猛然とした立ち合いからの速攻に「あいつは駆けてくる」と独特な言い回しで警戒する名横綱がいた。敬称略(富樫 嘉美)

あいつは駆けてくる

腰高の柏戸にも幾分あった

北海道福島町に記念館

○：千代の山、千代の富士を顕彰する横綱記念館が生まれ故郷・北海道福島町にある。エントランスには2横綱の銅像が飾られている。鶴岡市の姉妹都市・木古内町に程近く青函トンネルの北海道側入り口に位置する漁業の町。千代の山が「飛行機に乗せてやる」の言葉で秋元貢少年(千代の富士)を大相撲に誘ったのはよく知られている。入場料大人500円。

毎週火曜日付に掲載